

文芸OGネットワーク通信

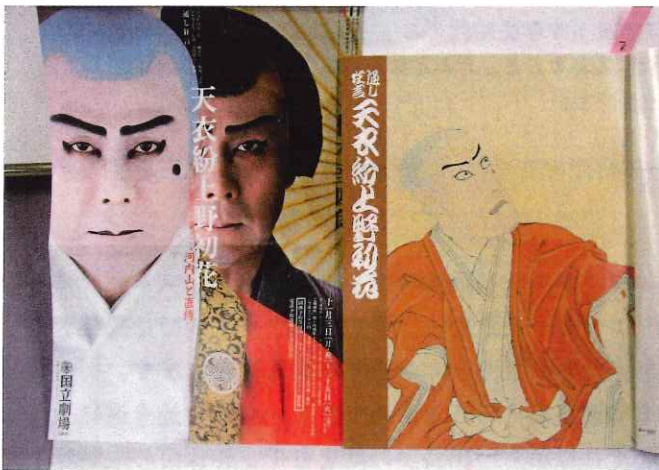
〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1 共立女子大学文芸メディア研究室内 文芸OGネットワーク
 Tel & Fax 03-3237-2681 URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
 代表 高橋 京子 発行：2014.3.29

vol. 20

共立祭に参加

去る10月19日(土)、20日(日)、2013年度共立祭が開催され、OGネットは今回も参加した。

共立祭の今回の全体のテーマは「共立維新」。すべてを一新するのではなく、パンフレットによると、受け継ぐべきものは受け継ぎ、新しいものは積極的に取り入れて共立祭を盛り上げようという思いが込められているということだった。



OGネットの展示は河竹黙阿弥の特集であった。劇芸術資料室からの資料と近藤瑞男先生からお借りすることができた資料を展示した。会場の壁には上演ポスターがずらりと並べられ、鮮やかな色彩と役者絵の表情が来観者を歌舞伎の世界へ誘うようであった。2日目は悪天候のため来観者はやや少なかったが、終了間際にも熱心に足を止めて観ていく人の姿があった。

その他、会の成立の経緯を示したパネル、在校生支援活動の様子を紹介した写真、通信のバックナンバーなどを展示した。また、会員有志が品物を持ち寄って、恒例のバザーが行われた。



今回は河竹黙阿弥を展示



今回も私達 OG ネットワークは、共立祭に参加し、展示発表を致しました。

今回は初めて歌舞伎を取り上げました。皆様もご承知のように2013年4月に新しい歌舞伎座が誕生して、この1年は毎月賑やかに柿落し公演が行われています。

私共は、資料整理をして毎年大切な資料を共立祭で紹介しております。これまでも「ハムレット」、「宝塚」と、それに何か縁のある年に展示してきました。そういうことから申しますと一番の話題は歌舞伎でしょう!! 連日、テレビ、雑誌の特集、新聞等で、それこそ初代歌舞伎座からのエピソードがたくさん披露され

ておりましたので、少し視点を変えて昨年がちょうど没後120年にあたり、年初から記念公演も行われていた河竹黙阿弥に注目しました。

歌舞伎をご覧になっていない方も一度は耳にしたことがあるのでは(?)というくらい、黙阿弥の七五調の台詞の数々は有名です。黙阿弥は江戸末期、最も江戸文化の爛熟した将軍家斉の時代に生まれ、天保の改革、黒船来航、幕府の崩壊、維新を経て明治26年に78歳で亡くなるまで文字通り激動の時代に数多くの作品を生みだしました。現在でも毎月とってよいくらい、どこかの劇場で上演され続けている作者です。当資料室にも上演ポスターが多く残

されており、どれを選ぶかで大いに迷いました。

また、本学の劇芸術コース教授、近藤瑞男先生にご相談した結果、先生ご所蔵の貴重な錦絵等もお借りすることができ、ポスター、プログラムのみの展示に重みを加えることができましたことは、感謝に堪えません。

入場者の中には、一枚ずつ熱心にご覧になる方や、写真を撮る方もいらっしゃいました。

研究室に残された所蔵品の埃を払って多くの方々への披露が叶い、資料と共に私達にとっても嬉しく思われる共立祭でした。

川瀬治子 (S52 卒)



共立周辺の思い出のスポットや学生時代のちょっとしたエピソードをはじめ、今、注目していることや興味のあること、なんとなくつぶやきたいこと etc... “何でもあり”の free space です。

第1回目は平成24年に卒業したばかりの、OG ネットワーク期待の若手、加藤智美さんに、神保町界隈を歩きながら思うことを綴っていただきました。

変わらないもの



大学を卒業して2年経っていました。私の中では、もう2年経ったのかと思います。

久しぶりに歩く神保町も少しずつ変わっていて、ずずらん通りにあった理髪店がチェーン店になっていたり、あったらろう建物も無くなり更地になっていました。大学の帰り道に通っていた三省堂も改装され、店内は綺麗になったものの、覚えていた本の位置もガラリと変わったため、違う書店に来てしまったのではと思わずにいられませんでした。大学の食堂から見えていた小学館の編集部も今は建て替えで工事の白いシートしか見えません。思い出の詰まった部室のある2号館も、あと数年すれば建て替えのために壊されてしまいます。

歩けば歩くほど景色は2年前と違って、少しもの寂しく思いました。けれども、変わらないものもそこにあることにも気づきました。

神保町を歩く人や店先で古本を真剣に眺めるおじさんたち、腹ペコの学生にはたまらないカレーの匂いや異国情緒あふれる看板。少し見える店内では、パリッとした

白いワイシャツに黒のベストを合わせたマスター、ゆったりコーヒーを飲む人、その横のテーブルでは編集者らしき人たちが打ち合わせをする姿も見られます。街の匂いや雰囲気はそのままなのです。いつもと違う道に入れば、そこは新しい出会いの始まりで、神保町の醍醐味でもあります。そうやって私はフラフラと学生時代は猫のように街を歩いていました。

ここで過ごせた日々はずっと忘れないだろうし、たまに戻って知らなかった姿を今後も見ていきたいと思いました。

加藤智美 (H24 卒)



連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々⑥ —

今回は、草創期の木造校舎で学ばれた、文芸学部日本文学専攻の5期生 浅野律子さんに書いていただきました。

思い出すこと

私が文芸学部に入學したのは、昭和32年4月、今はもうないあの木造の校舎です。

昇り降りにギシギシなる階段、冬の教室の石炭ストーブ、遅い講義には路地を通る豆腐売りのラッパの音がきこえました。

当時、文芸学部は草創期で、学内には活気があふれていました。学部のコースも学生の数も、今より少なく家庭的でもありました。学年担任の小野村洋子先生、本林勝夫先生には、卒業後も変わらずご厚情をいただきました。

各分野に一流の先生方が、他の大学から出講されて、講義をいただきました。間近に先生方の訾咳に接するまたとない機会でした。折角の講義でしたのに、その内容をほとんど憶えていないのを、申し訳なく残念

に思います。

岡崎義恵先生が最終講義で、「大学では試験の予告がある。世の中に出れば毎日が試験です」と言われました。

福原燐太郎先生は、「皆さんはいずれ家庭の人となる。他の人のお子さんを育てる場合もある。食事は人の心を柔らかくする。料理上手になるように」と言われました。

冬休みを利用しての久保田万太郎先生の集中講義は、大層おもしろく聴きました。のちの「湯豆腐や…」*の句と共に、洒脱でいらしたお姿が彷彿といたします。また、河竹登志夫先生、河盛好蔵先生、古川久先生ほか、諸先生方の教室でのご様子が目に浮かびます。

思えば短い4年間ではありましたが、多くの教えと生涯の友に恵まれ

ました。19歳で教室で出会って以来、半世紀をすぎる交友となりました。友人の輪に、どれほどなぐさめられ支えられましたことか。

たがいの気持ちを思いやり、身を案じての五十余年、家族を思うと同じく友人を大切に生きております。

今はただ学窓の全てをなつかしく、ありがたく思います。

浅野律子 (S36卒)

*湯豆腐やいのちのはてのうすあかり



庭園のバラを観る会 (鳩山邸にて)

劇芸術資料室から

演劇学会に出席して

昨年の10月12、13日の2日間、名古屋の椋山女子学園大学において日本演劇学会が開催された。統一テーマは「演劇とアーカイブ — 集積から運用へ —」である。この10年間、劇芸術研究所所蔵の演劇資料整理に携わっている身としては聞き逃せないテーマであり、加えて、共立女子大学から鈴木国男、村井華代両先生が研究発表され、阿部由香子先生が司会をされると聞いては、ぜひとも名古屋まで出かけなければと、13日の朝、新幹線にとび乗ったのである。

鈴木先生は、共立女子大学が所蔵する演劇資料が、どのような経緯のもとに収集され、築地小劇場関連の資料、北見治一氏寄贈資料、戦後の

古いポスター、チラシなど、他大学にはない貴重な資料がどれほど含まれているかを具体的に説明され、その整理に卒業生有志が週1回ボランティアで携わり続けていることをくわしく話されていた。宝塚歌劇の資料はほとんど鈴木先生が集められたものだが、その運用として、宝塚を主としたミュージカルの講義を共立女子大学のみならず他大学でも開講され、学生の興味が年々たかまっていることを力説されていた。村井先生は、「反ドラマをめぐる試論—大江・サイド・イスラエル」と題し、記憶と歴史に我々がどう対峙し演劇化するか、という視点に立ったまことに刺激的な発表であった。

2日間にわたる講演、シンポジウ

ム、口頭発表のうち、私が聴講できたのはその4分の1ぐらいであったろうか。資料収集にはお金と時間がかかることであり、どこの大学でも問題をかかえているようであった。その資料をいかに活用運用していくか、という観点にたってみると、問題はさらに多岐にわたっているように思われた。“かれい”深まる年代に突入した我々にとって、演劇資料整理は同時に時間とのたたかいでもある。

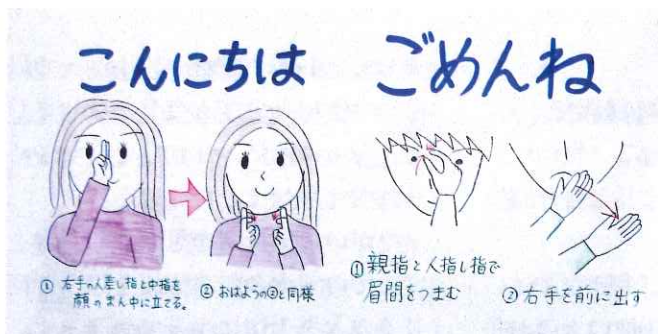
多田久恵 (S45院卒)



資料整理のひとコマ

サークル探訪 手話サークル

共立祭で展示部門第3位となった「手話サークル」を訪ねた。



世界にいろいろな言語があるように、手話はその言語と同じように発達してきたので、万国共通ではないが、共通点は多い。覚えなければならないことがたくさんあるが、サークルのメンバー達は、手話検定合格を目指しているということで熱心に指導を受けていた。部員数は8名で、小さいサークルではあるが、逆に「小さいから1対1で先輩から指導してもらえるので、他より上達は早いと思う」と小安夏南さんは言う。

入部のきっかけは様々で、「小学校の時の自由研究で手話を取り上げ、興味があったから」という足立奈々さん。「せっかく大学に入ったのだから、サークルの仲間を作りたい。見学したときの温かい雰囲気誘われて」という小安さん。「テレビドラマ『オレンジデイズ』を見て感動し、手話を学びたいと思った」という松本真帆さん。3人は、検定試験4級合格を目指している。3年生の久光万里子さんに検定試験について聞いてみた。検定試験の問題は、映像で行われ、手話で出題される。答えは、マークシートだそうだ。実力がなければ、合格は難しい。3年生は全員4級を持っているという。

そんな彼女達を指導するのが、元NHK手話ニュースキャスターの谷千春氏。手話サークルに月に1度いらしてくださるほか、共立の看護学部をはじめ、いろいろなところで手話を指導されているだけでなく、本やDVDも出されている。先生は、「手話はきちんと覚えないと、耳の聞こえない人との間に誤解を生じる。手話をきちんと覚えて欲しい。また手話だけでなく、手話を通して他者への思いやり、共感を学んでほしい」とおっしゃっていらした。そんな先生の温かさが彼女達を引き付けるようだ。中には、「その人の立場になって考えるようになってきた」という人もいる。先生から受ける「やさしさ」等の影響は大きいようだ。手話の講義も、丁寧にわかりやすく解説してくださる。それに答える彼女達も素晴らしい。

手話サークルの活動はホームページで見ることができ。検定試験終了後、全員合格の声が聞けると嬉しい。



「共立祭」で発表

掲示板

INFORMATION

OG ネットワーク総会

日時 6月14日(土) 10:00

場所 共立女子大学本館

文芸サロン講座：総会終了後

講師 小池淳一氏(国立歴史民俗博物館教授)

演題 東日本大震災と民俗文化資源

文芸OGネットワーク発足10周年を機に、紙面を一新することにしました。岡本誠司デザイン事務所の岡本氏にデザインと製作をお願いしました。

編集後記

EDITOR'S NOTE

会報が会員の皆様のパイプ役になっていると思うと、嬉しいと同時に責任の重さを感じます。先輩方の会報への思いを引き継ぎながら、今回通信20号を機に、新しいことにチャレンジしてみました。「free space」という連載を始め、タイトルのデザインを一新しました。今後もより良いものを作っていきます。ご意見、ご感想をお寄せください。(O)